

名利の虚しさ

「週末寸言」原稿 071020

元禄4年(1691)月、徳川幕府から法眼に叙せられた。僧侶の階級呼称として使われ、見ゆる智慧の眼の象の諸法が、法印に。これか、中世以後、僧侶以外にも、医師や連歌師などにまで適用された。初、俳諧の目。安原貞室、永貞徳、初期の俳諧の創始者。松貞徳、から三代目の。安原貞室の嫡流。門、俳諧の大御所であった。耳、権威好きの犬公方徳川吉、趣味だつた。で、はないか。その、一ヶ月前、俳聖松尾芭蕉は、「奥の細道」の旅以来長いこと留守にして、帰つてきた。芭蕉に、生、最高円熟期であり、「不易」と、俳諧から「軽み」の提唱へ。中、人に「文芸の革新」の真只門、人は、北村季吟の法眼に。位、についで、「翁でなく、なん違、ない。」「翁でなく、なん季吟、ない。」「翁でなく、なんの、か、という、北村季吟は芭蕉、師、だ、という、北村季吟は芭蕉、と、実、際、に、彼、が、師、の、教、え、を、受、け、た、

資料が、無い。これを証明する一次資料が、無い。芭蕉が江戸の俳壇に参入できたのは、季吟のお墨付が、あつた。1674、芭蕉は、宝2年(1674)、芭蕉は、時、京都にいた北村季吟から、彼の俳論書、門外不出の「埋木」を、免、許、されて、いる。これが、無ければ、田舎の芭蕉が、江戸の俳諧宗匠には、な、れ、な、か、つ、た。木、この、よ、う、に、実、利、の、高、い、「埋木」と、何、だ、ろ、う、？、その、奥、書、には、「この書は、家の深秘と、い、え、ど、も、宗、房、生、の、書、写、を、免、じ、て、ど、も、宗、房、生、の、書、写、を、の、な、り、と、ある。ここに、宗、房、とは、芭蕉の、当、時、の、通、称。つま、り、「埋木」の、原、書、の、コ、ピ、ー、を、取、ら、せ、て、も、ら、う、こ、と、そ、れ、に、奥、書、を、季、吟、に、書、い、て、も、ら、う、こ、と、書、を、季、吟、に、書、い、て、も、ら、う、こ、と、ど、こ、に、も、残、る、芭、蕉、の、書、き、物、は、出、て、こ、に、不、残、芭、蕉、の、書、き、物、は、よ、り、遥、か、に、高、い、芭、蕉、の、書、き、物、は、達、し、て、い、た。しかし、「法眼」と、呼、ば、れ、た、業、界、と、世、俗、社、会、で、評、価、さ、れ、た、の、は、季、吟、で、あ、つ、て、芭、蕉、で、は、な、か、つ、た。この、話、は、学、歴、や、は、な、か、つ、た。この、話、は、学、歴、や、は、な、か、つ、た。この、話、は、き、に、血、道、を、上、げ、て、い、る、御、仁、に、は、参、考、に、な、る。1、0、月、1、2、日、は、2、1、3、回、目、の、芭、蕉、の、命、日、「し、ぐ、れ、忌」。遺、言、に、は、「埋、木、半、残、方、に、之、有、り、候」とある。半、残、は、郷、里、伊、賀、上、野、の、弟、子。この、仏、は、門、外、不、出、の、秘、伝、を、他、人、に、あ、づ、け、な、し、で、生、涯、旅、の、空、